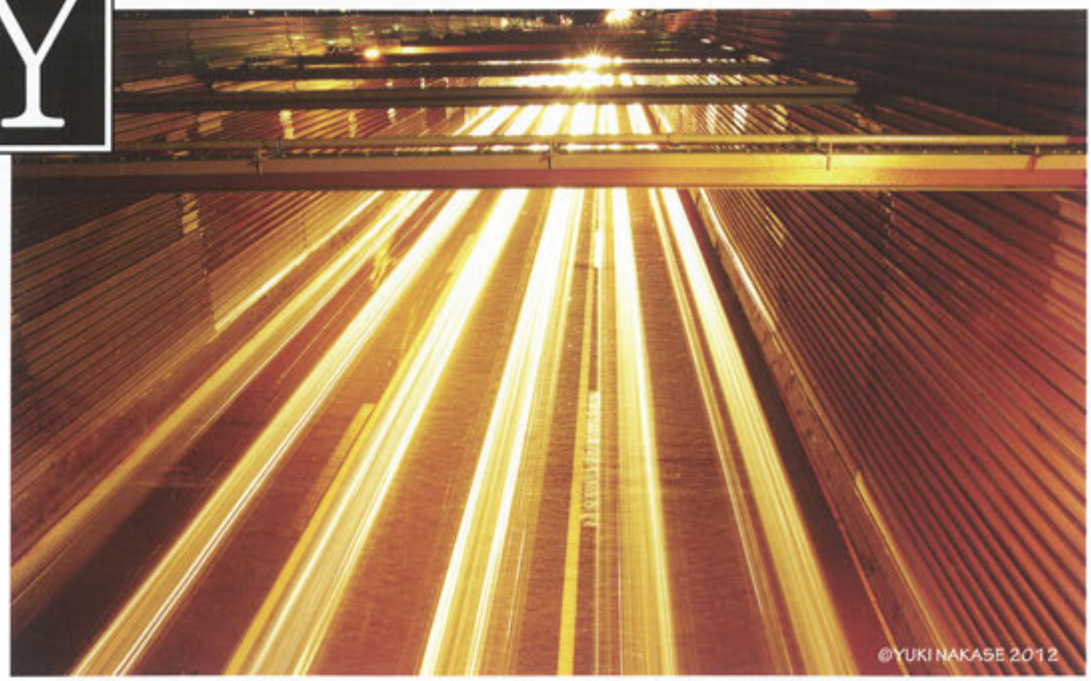
NY エッセイ ⑱

中瀬 有紀



Amber Night at the Brooklyn Bridge, May 2012

大学院二年目を終えて

アメリカの学校は9月に新学年が始まり5月に終わります。そして私はこの5月、ニューヨーク大学大学院で照明デザインを学ぶ3年間の2年目を終えました。学校から与えられる山のような課題と、さらに自分に対して自ら与える課題を前に全力で走り続ける毎日で、間違いと失敗により自分に何が不足しているかを知り、成功と他者からの理解により自信を得ました。アメリカの大学院で照明デザインを学ぶ時間は、私の人生にとって必要不可欠だと強く感じます。

日本では照明デザインをはじめ舞台の仕事を学ぶ最も一般的な方法は、働きながら下積みを重ね、先輩方の仕事に従事することで技を身につけていくといえるでしょう。学歴社会であるアメリカでも、業界に入るきっかけの多くは学校の授業ではなく劇場でのアルバイトです。働きながらエレクトリシャンやカーペンターの仕事を学び、それらを職業として生計を立てるようになると同時に、デザイナーとして働くきっかけを掴みます。

すでに舞台の仕事と照明デザインを経験してきたプロが大学院で何を学ぶのでしょうか。ひとつは、自分の発想と決断に対する理由とそれらを裏付ける調査の提示です。時代考証の徹底、作品、器材、劇場の精通、そして自分の決断がどのように現代社会に必要とされているかの答えが不可欠であり、一時的で感情的な発想だけでは、演出家や他のデザイナーとの共同制作の課程で自分の発想の軸を自主しながら臨機応変に光を操ることができません。さらに常に五作品ほど同時進行で携わる毎日は、一作品の舞台照明デザインだけでは生計を立てることが非常に難しいアメリカの現状に相応しい訓練です。照明デザイナーとして食べていくには、いずれ複数作品同時にデザインすることになります。

たくさんの学びの中で私にとっての最大の糧は「他者とのつながり」といえます。悪戦苦闘の末、手元に残ったものは他者と共に生きている実感と仲間との共感です。1人では完成することのできない舞台芸術だからこそ、全ての作品は他者との関わりの中から生まれます。つながりも知り合いもなかった5年前に初めて見たアメリカとは全く違う景色が、今は私の前に広がっていることに気付き、とても充実した「とき」が与えられていることに感謝しています。